

■おナミ v s 三助触手洗体一体験

——ワノ国にて、忍装束を纏い「新米くノーおナミ」として活動していたナミ。
任務の途中、疲れを癒すためロビンと共に入浴施設を訪ねていた。
偶然にも来客がほとんどない時間帯なのもあり、ほぼ貸し切り状態。
更に……

「洗体サービスまであるなんて、気が利いてるじゃない♪」

湯屋の使用人である「三助」が身体を洗うサービスまでしてくれる。

使用人といっても大ダコ、しかもオスだが、異種族ゆえに生理的な嫌悪感は小さく、洗体技術も良いため、
ナミたちもすぐに受け入れていた。

「最初はちょっと驚いたけど……」

「とても気持ち良いわ。流石プロね」

慣れた触手捌きで身体を流してもらうのは思いの外に気持ち良く、ナミもロビンも堪能していたが……
触手が背中から前に来た途端、表情を一変させる。

「んんっ♥ ま、前も洗うの？ 折角だけど、そこは自分で、あはうっ♥」

「ロビン?! ちょっと三助、そこまではしなくていいから!」

にゆるるっ♥ すりすりすりっ♥

「こらっ、聞いてんの? とっとと離れなさ……」

ずりゅんっ♥

「いひんっ♥♥」

(こ、このダコ♥ 調子に乗って……これだから魚介類はっ♥)

不意に胸部と股間をこすられ、丹念な愛撫を受けたかのようにロビンの悩ましい声が聞こえる。

ナミが制止したが、三助は無視してナミの胸と股間にも触手を伸ばす。

傍から見れば軽く流しただけかもしれないが、触手は一瞬にして細かな刺激を送り込み、ナミもすぐさま嬌
声を上げさせられてしまう。

大胆な触れ方にナミは怒りを禁じえないが……しかし三助の触手が与える快感もまた、経験豊富なロビンと
ナミを唸らせるものであった。

大きくも柔軟で滑らかな触手は触り心地がとても良く、吸盤やイボは配置・大きさ共に絶妙であり、軽く触
れれば女体の性感帯を程よい加減で刺激し、半ば強制的とすら言える恍惚感に襲われるのだ。

(ていうか、こいつ上手すぎ♥ こっちの方もプロってこと……?♥
軽く流されるだけで、私とロビンがこんなになるなんて……っ♥)

ナミも夜伽の経験と技術には自信があったが、なにせ相手は魚人ですらないため動きの予測もできない。
対し、三助は日頃から人体を相手にきた、言わばその道のプロ。
気付いた時には敏感な部分に触手が触れている……という具合であり、巧みな触手捌きにたちまち身体が牝
として反応させられる。

(これって普通なの? 仕事だからやってるだけ?
いや、だとしても……これ以上好きにさせるわけには……)
「んくっ……は、離して……あっ♥ ロビンっ♥ 能力……使えないのっ?」
「ダメ……力が、抜けて……おっくうっ♥♥」
「そんな♥ ロビンの能力まで効かないなんて♥ あっ♥ そこ、なぞるなああっ♥
そんなとこ洗わなくていいのっ♥ だから……ああんっ♥」
(まずいわ、このままじゃいいようにやられちゃう……♥
もしも男が入ってきて、こんなとこ見られたら……♥)

ロビンはいつの間にか湯に浸けられ、能力を封じられている。
そのため能力を発動できなくなっているが……実際には関係ないかもしれない。
早々に触手責めを受けたロビンはナミ以上に牝肉が蕩けており、もはや能力を発動する余裕がなくなってい
てもおかしくない状態だ。
ナミがいくら性戯に慣れているといっても、責められ続ければロビンと同じになってしまう。
身体を暴れさせ、番台に言いつけるという脅しもするが、どちらも効かず……身体の前と後ろをごしごしご
りごりと刺激され……抵抗空しく、ついに絶頂に昇り詰める。

「このっ……しつこいっての♥ も、もういいから♥ 充分洗ったでしょっ♥
これ以上しつこいと番台に言いつけるわよっ♥」
ずりゆりゆりゆんっ♥
「んおおおっ♥♥」
「あはあああっ♥♥」
(ダメっ♥♥ こんなタコに♥♥ 触手なんか!こいいい♥♥)
ずりゆずりゆずりゆうううっ♥ びくんっ♥♥ プッシヤアアアッ♥♥
「ああああ〜〜〜んっ♥♥♥」
「気持ち良い〜〜〜んっ♥♥♥」

腰が浮くほどの衝撃を覚えながら、ロビンと共に大きな声を上げて身を仰け反らせる。
しかもただ激しく絶頂しただけでなく、前後を刺激される快感に、堪らず思いのまま叫んでしまう。
余りに強烈な快楽、それも今まで味わったことのない質の肉悦で、つい正直な言葉を上げてしまったのだ。

(うそ……♥♥ こんなタコに♥♥ い、イカされる、なんて……っ♥♥)

恥部を触れられるだけでも抵抗があるのに、まさか絶頂させられ、快楽を認める喘ぎを叫ぶなど夢にも思わぬ屈辱。

だが、そんな中で反撃も逃走も許されない。身体が脱力し、浴槽のへりに捕まって震えるしかできないのだ。
打ち震えつつ、何とかしようと頭を回転させるナミだが……ここで更に、男性側の入り口から声が聞こえてくる。

【お、お姉さんたちいる♪】【こんにちは……えっ、超美人じゃん?!】

【ラッキー、三助もいるし!】

(男?! このタイミングで……! いえ、逆にこれで変なことはしなくなるかも……)

この湯屋は混浴。男が入って来れば、こんな痴態を三助以外にも見られるのではと恐れていたが……ついに男性客が入る時間帯となってしまった。

ナミたちの美貌とスタイルもあり、すぐに食い付く男性客。

イカされた直後とあって気まずさを感じるが、逆にナミたち以外の客がいれば、三助も大胆な行為はしないかもしれない。

実際に触手も股間と背中から離れていき、やっと解放されたことでナミは安堵の溜息を吐く。

「ん……っ♥ 新しいお客さん、ね……♥ ほら、相手してあげなさい……♥」

(流石に、大っぴらには仕掛けて来ないみたいね……♥ 癪だけど、この辺で許してやるか……)

【あ、三助! こっちはいいから、その分お姉さんたち洗ってあげてよ!】

「ひっ♥♥」

「えっ♥ 何勝手なこと言って……」

【イヨーッ!】

ポンッ!

「ちょっと! あんたも安請け合いしてんじゃ……」

にゆるるっ♥ ごしごしっ♥ ずりゆりゆりゆううっ♥

「んはひいいいいっ♥♥」

「はっ激しっ♥♥ もっもういいからっ♥♥

男たちが見てる♥♥ 見てるっからああああああ♥♥」

【はい、しっかり見てまーす♪】

【いつ見ても三助のテクすげーなー】